シネマ女性学

沖縄に魅せられて

松本 侑壬子・ジャーナリスト

カラカラとは、沖縄特産の蒸留酒、泡盛を入れる酒器のこと。語源の１つは、焼くときに中に入った破片が、器が空になるとカラカラと鳴ることからその名がついたとされる。

この映画は、リタイア後の一人旅で沖縄に来たカナダ人男性と、家出した主婦との出会いと旅を描く―と言えば、何だかいかにも！な中年ロマンス観光映画的に聞こえるかもしれない。確かに、海も空も美しい南国の自然、おいしい泡盛や郷土料理、伝統の織物芭蕉布、あるいは巨大な米軍基地も風景として登場する。

しかし、この映画の魅力は不思議な心の安らぎである。落ち着いて、目に見えるものの奥にある声に耳を傾けるような謙虚さ、瞑目し、自らの心の内と交わす対話。不安で孤独な心がゆっくりと満たされてくる喜び。沖縄の素朴な小さな島で、こんな心の澄み渡る旅である。

沖縄・那覇で気功クラスの合宿に参加した元大学教授のピエール（ガブリエル・アルカン）は、残り１週間を北部の島を回って気ままに過ごすつもりだった。偶然知り合った主婦・純子（工藤夕貴）に１日観光案内してもらうが、翌日、顔を腫らした純子が夫の暴力から逃げ出してきたと訪ねてくる。事情を聞き、「殴る夫なんて、DV じゃないか。なぜ、出て行かない？」と憤慨するピエールに、「でも、私にも落ち度があった」とか「夫が反省して変わってくれるかもしれない」と言い訳する純子。そして、家族を置いてピエールと一緒に旅をしたいと、戸惑うピエールの車に同乗するが…。

英語ぺらぺらの純子（工藤の英語は完璧だ！）は、東京から移住したといい、久しぶりの開放感に高揚気味。心の平安を求めて来たピエールとは当然ながら性格も境遇も違う。道中、二人の率直な会話の中にカルチャーショックや発見や共感が行き交い、時に遠慮会釈ない口論をしたりもする。島の素朴な自然の中でピエールは、初めて胸の奥に積み重なった不安を口にする。２年前の親友の死から立ち直れないこと。夢を諦めて生活の安定や社会的地位を選んだ自分、長年よき夫、よき父親を演じてきたが、結局家族といい関係は築けなかったこと。父親の死んだ年齢に近づくのが怖い…と。

初めて気持が触れあった二人は、その夜、満たされた気持で抱きあう。ピエールは「セックスしたのは３年ぶり。もうそんなことは起こりえないと思っていた」。純子を殴った夫と争ったことも、「53 年ぶりに人を殴った。小学校４年生のときで、そのときも負けた」と率直だ。

だが、反抗期の息子からの電話で、戻ってきてほしいと言われた純子は、「夫とやり直してみる」と帰っていく。DV 男は変わりはしないよ、との言葉を飲み込んで見送るピエール。ピエールのつぶやきは、全く的を射ている。「一つの土地に 70 年間も外国の軍事基地があるなんて、考えられない」というのも。沖縄を舞台にした映画と言えば、沖縄にのしかかる負の歴史を問うものか、逆に底抜けに明るい南国の風土と温かい人情の織りなす祝祭的な一面を描く作品がまず思い浮かぶ。だが、こんなに素直に沖縄への愛を感じた映画はない。欠点も迷いも多い愛すべき主人公らへの共感を込めて。

※本作品のプロデューサー宮平貴子さんは「We learn」2011 年 11･12 月合併号「このひと」で紹介した。

『カラカラ』

日加合作映画（104 分）／クロード・ガニオン監督

1月12日より沖縄シネマQ先行公開、19日より全国ロードショー

© 2012 KARAKARA PARTNERS & ZUNO FILMS